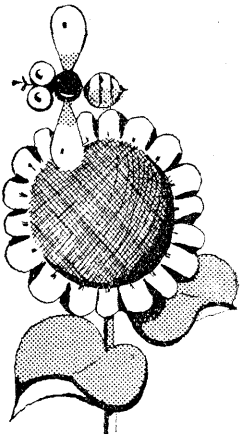
幼児のボール遊び（ボールゲーム）に関する研究（3）



岡本卓夫・西真田光代・三谷みや子

に就いて報告すると同時に、今まで観察して来た、子供の自由なボール遊びに就いての全体的結論を報告する。

一、被験者（満五歳児）

第三回テスト
男一五名　女一五名
第四回テスト
男一八名　女一八名
第五回テスト
男三三名　女三三名
第六回テスト
男五四名　女四九名

二、期日

第三回テスト
昭和卅年十一月廿一日
第四回テスト
昭和卅年十二月廿一日
第五回テスト
昭和卅一年一月十四日
第六回テスト
昭和卅一年一月廿八日

三、場所

第二回実験においては二人での遊びに就いて観察報告したが、本回では人数を増加し、然もそれを色々に組合せて行ったもの

徳島市方ノ上保育所（遊戯室）

四、方法（観察及質問法）

(イ)環境

観察者は遊戯室の片隅に、その計時、記録に知れない様に位置し、担任教師は他方の隅で幼児の遊びを見守っている。

(ロ)使用ボール

第一回実験で得た結果から一応次の三つを選んでみた。

1 幼児用色彩ボール　2 テニスボール
3 ピンポンボール

(ハ)ボールの与え方

最初は幼児用色彩ボールを、次にテニスボール、最後にピンポンボールの順に与え各各のボールに就いて三分間ずつ遊ばせた。

(ニ)実験に入る前の教師の動機づけ

『今日はAちゃんやBちゃんや……（皆んな）の好きなボールで遊ばせてあげますから皆んなで仲良く好きなことをして遊びなさいね。あそこに居る人（観察者）は時々この保育所へ来ますが自分のお仕事ばかり勝手にしているのですから放って置きなさ

い。先生が此処で皆んながどんなに仲良く遊ぶか見ててあげますからね。さあ遊びなさい』との様にして子供がボールを手にすると同時にストップウォッチを押した。

㈱ 観察内容

1 遊びの種類

2 遊びの様式

3 遊戯中に生れている諸ルール

㈵ 質問内容

（第一表） 遊びの種類

性	男組									女組									ミックス組									
テスト回次	三	四	五	五	六	六	六	計	順位	三	四	五	五	六	六	六	計	順位	三	三	四	四	四	五	六	六	計	順位
1グループの人数	3	4	5	6	8	10	20			3	4	5	6	8	10	15			男女 2 1	男女 1 2	男女 3 1	男女 2 2	男女 1 3	男女 3 3	男女 4 4	男女 5 5		
遊び ＼ 編成グループ数	5	3	3	3	3	1	1			5	3	3	3	3	1	1			5	5	3	3	3	1	1	1		
投捕球遊び（投げ合い捕え合い）	31′40″ 13	17′30″ 7	4′ 2	6′ 2	6′ 0	3′ 1	0	68′10″ 25	2 2	12′40″ 6	8′ 3	7′45″ 3	9′ 3	6′ 2	3′ 1	0	46′25″ 18	3 3	17′20″ 10	7′20″ 4	8′30″ 3	8′30″ 3	3′50″ 2	0	0	0	45′30″ 22	2 2
打球遊び（一度はずむ様に投げたボールを打つ）	1′20″ 1	7′ 5	2′ 1	6′ 2	0	0	0	16′20″ 9	3 3	0	0	0	0	0	0	0	0	8 8	3′ 1	0	0	0	0	0	0	0	3′ 1	6.5 6.5
ボールの取り合い（一人が投げそれを皆なが取る。取った者が投げる）	3′30″ 2	0	12′ 4	9′ 3	27′ 9	24′ 8	0	75′30″ 26	1 1	30″ 1	0	9′ 3	6′ 2	21′ 7	21′ 7	0	57′30″ 20	2 2	0	3′ 1	9′ 3	9′ 3	0	6′ 2	6′ 2	0	33′ 11	3 3
転がし合い	6′ 3	30″ 1	30″ 1	0	0	0	0	7′ 5	6 4	0	0	0	0	0	0	0	0	8 8	7′20″ 3	0	30″ 1	2′ 1	0	0	0	0	9′50″ 5	4 4
手まり遊び（手まりのみをして交互に遊ぶ）	0	0	0	0	0	0	0	0	8 8	22′15″ 12	16′ 5	9′ 3	12′ 4	0	0	0	59′10″ 24	1 1	0	0	0	0	3′ 1	0	0	0	3′ 1	6.5 6.5
手まり鬼（一人が手まりして逃げ他が追っかけ，ボールに触ったら交替する）	0	0	0	0	0	0	0	0	8 8	6′30″ 3	6′ 2	0	0	0	0	0	12′30″ 5	4 4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8.5 8.5
ぶっつけこ合い（一人がグループの者にぶっつける又取った者が誰かに当てる）	0	30″ 1	1′ 1	6′ 2	0	0	0	7′30″ 4	5 5.5	0	0	0	0	0	0	0	0	8 8	0	0	3′30″ 2	0	0	0	0	0	3′30″ 2	5 5
ドリブル廻り遊び　皆んなで円になり一人が手まりをしてその円周を廻って来て次の者に渡す	0	0	0	0	0	0	0	0	8 8	0	0	0	0	0	3′ 1	0	3′ 1	6 6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8.5 8.5
平行遊び	0	0	3′ 1	0	0	0	9′ 3	12′ 4	4 5.5	3′ 1	0	0	0	0	0	9′ 3	12′ 4	5 5	11′25″ 6	27′40″ 13	5′30″ 2	9′ 5	16′50″ 4	3′ 1	3′ 1	9′ 3	79′25″ 35	1 1

※ボールの種類によって特別な遊びが見られなかったのでその種類分けの考慮せずに性別のみとめた。

※※この数字は遊んだ時間であり他は遊びが行われた時の合計頻数である。（例えば9′30″九分三十秒の意）

※※平行遊びは、その時のグループの者が同じ遊びをせず各々自分の勝手な事をしている時をさしている。

第三回第六回テスト終了後において次の様な質問をした。但し第三回は各テスト毎に、第六回は全員が全テスト終了後に行った。

1. Aちゃんは何をして遊ぶのが一番好きですか
2. Bちゃんは何人で遊ぶのが好きですか。
3. Cちゃんは男（女）の子ばかりであそぶのが好きですか、それとも女（男）の子と一緒に遊ぶのが好きですか。

第二表　ルールについて

ル　ー　ル	遊　び
1 一度はずませる様に投げる	投捕球遊び
2 はずませない様に投げる	〃
3 自分の位置から投げる	〃
4 片手の平手で打つ	打球遊び
5 ボールを取った者が投げる	ボールの取り合い
6 はずまない様に転がす	転がし合い
7 一定回数（数を数えるか／歌を唄うか）で交替する	手まり遊び
8 ボールに触れられたら交替する	手まり鬼
9 じゃんけんで順をきめる	手まり遊び
10 ボールを取った者がぶっつける	ぶっつけ合い
11 円周上を投捕して廻す	投捕球遊び
12 ドリブルして一周し次の者に渡す	ドリブル廻り遊び

第三表　Aちゃんは何をして遊ぶのが一番好きですか

性＼順	1　位	2　位	3　位	4　位	5　位	6　位
男	投捕球遊び	転がし合い	ボールの取り合い（うばい合い）	ぶっつけ合い	打球遊び	手まり遊び
	19　8　27	5　4　9	2　6　8	2　2　4	2　0　2	0　0　0
女	手まり遊び	投捕球遊び	転がし合い	ボールの取り合い（うばい合い）	打球遊び	ぶっつけ合い
	19　9　28	5　2　7	3　1　4	1　2　3	2　0　2	0　1　1
テスト回次	三　六　計	三　六　計	三　六　計	三　六　計	三　六　計	三　六　計

第四表　Bちゃんは何人で遊ぶのが好きですか

性＼順	1　位	2　位	3　位	4　位	5　位	6　位
男	2　人	4　人	3　人	6人以上	5　人	6　人
	13　10　23	9　1　10	3　4　7	1　5　6	3　1　4	0　1　1
女	2　人	3　人	4　人	1　人	6人以上	5　人
	16　6　22	8　1　9	3　3　6	3　2　5	0　2　2	0　1　1
テスト回次	三　六　計	三　六　計	三　六　計	三　六　計	三　六　計	三　六　計

第六表　男（女）ばかりで遊ぶのが好きか女（男）と一緒が良いか

性＼テスト回次＼組	男　組	女　組	ミックス組
	三　六　計	三　六　計	三　六　計
男	26　18　44		4　2　6
女		24　10　34	6　5　11

第五表

年令	相手の数
4	1.95
5	2.04
6	1.97

(ト) テストのグループ編成

男組グループと女組グループと男女組ミックスグループの三つに分けたが、その内容は第一表に示す通りである。

六、結果の考察

A遊びの種類

第一表に示す様な遊びが行われているが、その数において其二のものと殆んど同じで、キックが無くなり「ぶっつけ合い」と「ドリブル廻り遊び」が増えているに過ぎない。故にこの年令におけるボール遊びは人数の増加に余り関係されず大体十種類余ではないかと思われる。これ等遊びの要因になっているのは其二と同様、ドリブル、スロー、キャッチ、ロール、バット（キック）等であり、それが能力に応じて種々組合わされている。又彼等に愛好されると思われる遊びは、第一表の遊んだ頻数、時間でみられる様に、各テストを通じて、男組では「ボールの取り合い」「投捕球遊び」が断然多く、続いてやや少いが

「打球遊び」が行われている。女組では「手まり遊び」「ボールの取り合い」「投捕球遊び」が優位を占めている。又ミックス組に於ては「平行遊び」が断然多く、続いて「投捕球遊び」「ボールの取り合い」となっている。男組、女組、ミックス組を通して共通に多く行われている遊びは「投捕球遊び」「ボールの取り合い」である。然も「投捕球遊び」では、二人……五人……十人と人数が増加するに従ってその頻数、時間が少くなっているに反し、「ボールの取り合い」では逆に多くなっている。これ等は未だ彼等が、社会的場面に充分順応出来ない事を示して居り従って組織化するだけの能力を持っていないと云う傾向を示しているものと思う。

又質問の結果（第三表）では「投捕球遊び」が男女夫々一、二位を占め、「ボールの取り合い」は三、四位を占めて居り、結局男女共通して好まれる遊びは「投捕球遊び」であると思う。然し「ボールの取り合い」が未組織的ではあるが人数の増加に従って多くなる事実は、何等かの形で場面を構成してやれば適切な「組織的なボール遊び」が出来相だと云う暗示をしてくれていると思うのである。打球遊びが男子に好まれる様であるが、ハンドリングが困難であり時間を要するのか第三表では五位を占めている。其他「転がし合い」では其二に於て男子では首位を占めていたのが非常に少くなって居り、女子では依然行われていない。然しこの種目は質問の結果、第三表では男女夫々二、三位を示して居り人数が少なければ好まれる遊びではないかと思われる。「ドリブル鬼」は女子に好まれ、「ぶっつけ合い」等の荒々しい遊びは女子では全然なされていない。「ドリブル廻り遊び」も一度だけ行われたが、仲々順番が来ないので続けられなかった。概してミックス組に於ては、各テスト共該当仲間で遊ぶ事は同性組より少く、平行遊びが多く行われた。（第一第四表参照）

B遊びの様式及グループ構成

全般的には其二のものと同じ様な様式であるが、人数の増加によって変っているものは隊形である。

二人の時は当然向い合って位置するが、三人の時は三角形、四人の時は正方形又は矩形五人、六人、八人と円形を作って位置する。これは特に投捕球遊びに於てであって向い合っているものへの投球から次第に隣りの者へ次々と投球してゆく場合が多い。そしてミックス組に於ては、同性同志が隣り合せに位置し、その投球も同性間同志のものが多くなっている。「ボールの取り合い」「ぶっつけ合い」等は一定の隊形を作らず、ボールを持った者の周囲に集まってざわめいているに過ぎない。そして四人くらいならリーダーに従って何とか組織を立てるが、五人以上くらいになると、じゃんけん（特に手まり遊び等）もなく、リーダーは性格的に強いか、活動的なものがなり自由にその遊びを支配している。そして十人くらいまでなら、未組織ではあるが、それ故に一緒には居るけれど各人相互関係をもたないのであるが、一つのボールに挑戦し様として各々活動する傾向がみられる。それ以上十五、二十人と増加した場合、五―十名の者は、他の子供の遊びを見たり、

窓辺に寄りかかったりしている状態である。又プレイヤーの間隔は四人くらいまでの時は五米くらいまで、とっているが、多くなるに従って狭められ一米―五十糎くらいになる。又人数の増加に従って遊びに入るまでの時間が長くなっているが、同性間なれば、何とか遊んだり、又遊ぼうとして相談し様とする傾向がみられるが、ミックス組では殆んどの場合勝手に行動をとっている。何れの場合でも、男子は女子よりもダイナミックである。

C遊戯中に生れているルール

人数の増加に余り関係なく遊びが存在している様にルールに於ても殆んど同じで（第二表）其二に加わるに

(1)ボールを横に（隣りの人に）廻す。

(2)はずまない様に投げる。

(3)ドリブルして、一周したら次の者に渡す

(4)ボールを取った者が投げる（ぶっつける）等である。そして彼等に愛好される遊び程ルールが多く複雑であるが、多くは一つの遊びに対して一つのルールである。然もこれ等ルールは其二でも報告した様に、或一人のリーダーの動作や行動を模倣することに依って生れているもので、所謂、反則と云う様なものではないのである。

七、結　論

其二、其三、と子供の自然の姿のボール遊び（ボールゲーム）に就いて、二人……二十人と増加していったものの観察をして来たが、それ等の一応の結論を出してみたいと思う。

A幼児に好まれる遊び

(1)男子では「投捕球遊び」「ボールの取り合い」「転がし合い」「打球遊び」等

(2)女子では、「手まり遊び」（又それを基礎とした遊び）「投捕球遊び」「ボールの取り合い」「ぶっつけ合い」等。

(3)特に男女共通としては「投捕球遊び」がよく、大勢になれば「ボールの取り合い」が良い。

(4)遊びの種類は人数の増加に余り関係せず十種類余である。

B遊びの様式

(1)性格的に強いか或は、活動的な子供がその遊びのリーダーになり性とか技術には余り関係しない。

(2)同性間グループは一般に協力的であるが異性間では平行遊びが多い。

(3)一番好まれるグループは二人であるが、四人くらいまでなら、お互に自分達でルールを定め協力し、同目的に向って遊ぶ事が出来る。

(4)五名―十名なら未組織ではあるが一つのボールを使用し遊ぼうとする傾向がある

(5)二人遊びが好まれるので人数を増加した場合でも偶数成員が良い。

(6)十名以上のグループは構成しない方が良い。

(7)対人距離は最大五米以内が良い。（投捕球遊び、転がし合い、打球遊び）

(8)投捕球遊びでは人数の増加に従って円形をつくる傾向がある。

(9)この年令に於ては性別を考えなくても良いと云われているが、遊びによっては考慮すべき点がある。

C身体支配とコントロール

（58頁につづく）

「森小屋の絵」などと、叙述的な答え方をする。もし五歳までに、このような叙述的な言い方ができる幼児があれば、その幼児はよほど知能が高い。

もしさらに、絵の内容を解釈（interpretation）していう幼児があれば、その知能はきわめて高いと考えてよいであろう。これは、十二歳ぐらいの知能をもつ子どもの能力とされている。

たとえば、「どろぼうが入って来たから女の人がとび出したの」だとか、「赤ちゃんが病気になったので、お母さんが医者のところへかけて行くの」などというような例である。筆者の調査では、ある三歳五カ月のきわめて優秀な知能の子どもが、簡単な解釈的説明をしている。

また、非常に知能の高い子どもは、一歳十カ月頃から、他人の言葉にたいし自発的に理由をたずねたり考えたりするようになる。

たとえばある子どもは一歳十カ月から満二歳にかけてしばしばこの種の会話をおこなっている。一歳十カ月台におこなったその一例をあげるとつぎのようである。

理由を考える例

(1)母親「もうねましょう。」
子ども「寒いから？」

(2)皆が出掛けたとき祖母が「わたしは行かないよ。」というと、
「おばあちゃま、足いたいから？」

(3)父が庭で子どもをだいていて鼻をかみに帰り、まただいて庭に出たが、しばらくして帰りかけると、だかれたまま、
「また鼻出たの？」

なお、列挙・叙述・解釈の三種類の話し方（考え方）とそのもとになる知能は、父兄が、少しずつ上の段階に進むように幼児に模範を示して導くことによって、幾分早く発達することができる。（次号につづく）

（38頁よりつづく）

(1)大きなボールを使用した場合の「手まり遊び」距離が短い時（二米まで）の投捕は大体成功。

(2)投捕球時その間隔が二米以上になれば、コントロールが充分でなく、従って、距離調節やスピードに於て屢々失敗している。特に小さなボールを使用した時に多い。

(3)飛球に対するインサイトは充分でない。

(4)従って捕球に於て腕の反応は遅い。

(5)投球に於ける、手、足のコンビネーションの未だ不充分な者が居る。

Dルールに就いて

(1)彼等に愛好される遊び程、ルールが多く複雑であるが、殆んどの場合、一つの遊びに対して一つのルールである。

(2)彼等のルールは模倣することから生れ、プレイをするためにのみ約束として生れて居り、所謂ゲームを面白く変化さすと云う為のベナルティーはない。

(3)彼等のボール遊びに使われているルールは総てで十種類等である。

八、今後の問題

以上筆者は子供（五歳児）の自然の姿に於けるボール遊びに就いて観察して来たのであるが、これ等の要因を根拠として、小学校低学年に於けるボールゲームとを比較検討し、どの程度まで組織化出来、どの程度のルールが守れるかを科学的に、然かも教育的見地に立脚して構成してゆき、幼児に好ましいボール遊びを構成してゆき度いと思っている。

（徳島大学学芸学部・他）